

ブッダゴーサ作品と「ニダーナカタター」における入胎の記事の相違 ——註釈書的要素に注目して——

越 後 屋 正 行

1. はじめに

『ジャータカ・アッタカタター』（以下、JAとする）、『アパダーナ・アッタカタター』（以下、ApAとする）の一節をなしている「ニダーナカタター」（以下、Nkとする）の作者について、JAがブッダゴーサの真作かどうかは、藤田宏達〔1981〕において疑問視されている。また、ApAは、ApA introd. p.xviiにおいて、製作者は不明であると指摘されている。ここから、ブッダゴーサとNkの作者は異なるものとした上で、本論文では、ブッダゴーサ作品（『長部註』『中部註』『相応部註』『増支部註』）とNkにおける入胎に関する記事の相違に注目する。なぜなら、アッタカタターは聖典（パーリ）や古註釈を用いて著わされたものであり、そのアッタカタターの記事に相違があるのは、聖典や古註釈の相違によるものと考えられるからである。そして、成立年代が431-434年頃と推定されているブッダゴーサ作品とNkにおける入胎に関する記事の相違を、ブッダゴーサ作品よりも成立の古い北伝資料と比較し、対応関係（註釈書的要素：上座部の註釈書の記述と対応する部分）が認められたならば、そのアッタカタターの記事の相違は北伝資料が用いられたか、北伝資料と対応する伝承をもつ古註釈が用いられたという可能性が指摘できる。このアッタカタターの記事に相違が起きた理由を、①内（上座部）からは聖典の相違、②外（上座部以外）からは使用した北伝資料の相違、③内外からは古註釈（インド起源とスリランカ起源）の相違という三つの側面から考察していく。

2. 上座部における入胎の記事

上座部で入胎に関する記事を扱う資料は、『長部』『大譬喩経』（DN: II.12-14）、『中部』『稀有未曾有経』（MN: II.119-122）、『増支部』の二ヶ所（AN: II.130-131, AN: IV.313）と、これらに対するアッタカタター、及び、Nk（JA: I.47-52, ApA: I.52-56）である。

ブッダゴーサ作品と「ニダーナカター」における入胎の記事の相違（越後屋）（183）

(1) : Nk (JA: I.47-48) には、「劫・仏・転輪聖王」という三つの騒ぎの記述がある。この三つの騒ぎは、『相応部註』(SA:I.[130]) に記述が確認できるが、ブッダゴーサ作品の入胎に関係する記事の中で確認はできない。

(2) : 「大譬喩経註」(DA: II.427) には、三十波羅蜜、五大遍捨、七大布施等の記述があるが、Nk の入胎に関係する記事の中で確認はできない。

(3) : 「大譬喩経註」(DA: II.427-428) には、「しかし、神々には『人間たちの数によって、今や七日後に死去が起こるであろう』という五つの前兆 (pañca pubbanimittāni) が生じた。花飾りが萎む。衣服が汚れる。脇より汗が出る。身体に醜さが現われる。神が神の座席に確立しない」という、ヴィパッシー菩薩に生じた五つの前兆の記述がある。この五つの前兆は、『如是語経』(It. 247 [76]) に記述が確認できるが、Nk の入胎に関係する記事の中で確認はできない。

(4) : 「大譬喩経註」(DA: II.430-431) には、菩薩は死心と結生心を知ることがないというマハーシーヴァ長老の説を紹介する記述があるが、Nk の入胎に関係する記事の中で確認はできない。

(5) : 「大譬喩経註」(DA: II.432) には、「業・時節・種子・心・法」という五つの決定の記事があるが、Nk の入胎に関係する記事の中で確認はできない。

(6) : Nk (JA: I.50) には、菩薩が入胎したときに起こった三十二種の前兆の記事があるが、ブッダゴーサ作品の入胎に関係する記事の中で確認はできない。

(7) : 「菩薩の母は五戒をそなえている」、(8) : 「菩薩の母は五妙欲をそなえている」という記事に対して、「大譬喩経註」(DA: II.435-436) は註釈をしているが、Nk の入胎に関係する記事の中で確認はできない。

(9) : 「大譬喩経註」(DA: II.29 [436]) には、「菩薩は背骨を後ろにし、法座において法説する者のように結跏趺坐をし (pallaṅkam ābhujitvā), 東に向かって坐られた」という菩薩の結跏趺坐の記事があるが、Nk の入胎に関係する記事の中で確認はできない。

3. 北伝資料における入胎の記事

これらの(1)-(9)の上座部で相違が認められる記事を北伝資料と比較していく。まず、(1), (2), (4), (5), (6)は、北伝資料に対応する記事が見られず、(2), (4), (5)はブッダゴーサ作品の独自の記事、(1), (6)はNkの独自の記事であると言える。

次に、(7)の記事は、ブッダゴーサ作品よりも成立の古い〔1〕『修行本起経』（後

(184) ブッダゴーサ作品と「ニダーナカター」における入胎の記事の相違（越後屋）

漢の竺大力と康孟詳)や〔2〕『太子瑞応本起経』(呉の支謙)において確認ができず、Nkと関連があり、ブッダゴーサ作品よりも成立の古い〔3〕『過去現在因果経』(劉宋の求那跋陀羅)、〔4〕『普曜経』(西晋の竺法護)においても確認ができない。ここから、Nkにその記事がないのは、ブッダゴーサ作品と①異なる聖典や③異なる古註釈を用いた可能性がある。

同様に、(8)の記事も、ブッダゴーサ作品よりも成立の古い北伝資料の中で確認できないのは、Nkがブッダゴーサ作品と①異なる聖典や③異なる古註釈を用いた可能性がある。

次に、(3)の記事は、〔3〕(T3.623b)において、「仍て天宮に於て、五種の相を現じ、諸天子をして、皆悉く、菩薩の期運、応に下りて作仏すべきを覚知せしむ。一には菩薩の眼、瞬動を現じ、二には頭上の花萎み、三には衣に塵垢を受け、四には腋下より汗出で、五には本座を楽しまず」と記し、〔5〕『仏本行集経』(T3.676c、隋の闍那崛多)においても、「爾の時、護明菩薩大士、天寿満ち已りて、自然にして五衰の相を現ずる有り。何等をか五と為す。一には頭上の花萎み、二には腋下より汗出で、三には衣裳垢膩し、四には身威光を失い、五には本座を楽しまず」と記している。ここから、兜率天で菩薩に五つの前兆が生じていたことが確認できる。Nkにその記事がないのは、ブッダゴーサ作品と②異なる北伝資料や③異なる古註釈を用いた可能性がある。

次に、(9)の記事は、〔4〕(T3.492b)において、「中で跏趺坐するを見る」と記し、〔6〕『方广大莊嚴経』(T3.549c、唐の地婆訶羅)において、「悉く摩耶聖後の身を現ぜしむ。皆菩薩有りて、母の右脇に於いて、結加趺坐す」と記し、同じく〔6〕(T3.550b)においても、「阿難、一切の菩薩、將に胎に入らんとする時、母の右脇に於いて、先ず是の如き宝莊嚴殿有り。然る後に兜率天宮より、神を降して胎に入り、此の殿中に於いて結加趺坐す」と記している。〔7〕『ラリタヴィスタラ』(LV.59-60)において、「菩薩はマーヤー妃の胎の中に入っているとき、右脇(dakṣiṇapārśva)に結跏趺坐をして(paryāṅkam ābhuñjivā)坐られた」と記し、〔8〕『マハーヴァストゥ』(Mv: II.16)においても、「実にそのとき、胎内で結跏趺坐をして、右脇におられた」と記している。ここで注目すべきは、〔4〕以外の資料では、下線部におけるように「結跏趺坐」と「右脇」の記事が密接な関係になっている。それに比べて、ブッダゴーサ作品よりも成立の古い〔4〕では、「跏趺坐」(T3.492b,l. 26)の記事に対して、「右脇」の記事が「妙後の右脇に処し、坐す所、宝浄の棚閣なり」(T3.492a)、「諸の可来者、後の右脇を觀るに、悉く菩薩、神の母胎に降りるを見る」(T3.492b,

ブッダゴーサ作品と「ニダーナカター」における入胎の記事の相違（越後屋）（185）

1. 12) と、離れた場所に記されている。「長部註」でも、「結跏趺坐」(DA: II.436)の記事に対して、「右脇」の記事が「母を右回りし、右脇 (dakkhiṇapassa) を裂いて、胎に入ったようになった」(DA: II.431) と、離れた場所に記されている。ここから、もともと「結跏趺坐」と「右脇」の記事には密接な関係がなく、後代になってから、それらの記事が密接な関係になったと言えるので、ブッダゴーサ作品は「結跏趺坐」と「右脇」の記事に密接な関係がない②古い北伝資料か③Nk と異なる古註釈を用いた可能性がある。

4. 結論

ブッダゴーサ作品と Nk との関係性についてであるが、(7), (8)の事例を調査した結果、Nk はブッダゴーサ作品と①異なる聖典や③異なる古註釈を用いた可能性が指摘できる。しかし、(1), (6)など、独自に増広や挿入がされた記事も存在している。そして、ブッダゴーサ作品にも(2), (4), (5)など、独自に増広や挿入がされた記事が存在するが、その中で(3), (9)の記事は、特に②大乘的仏伝との対応関係が確認できる。従来の研究では、Nk を中心に上座部の仏伝が論じられてきた傾向があるが、ブッダゴーサ作品や Nk が使用した聖典や古註釈、北伝資料にも相違が認められるので、今後はそれらの相違に注意し、大乘的仏伝との関係性にも注目して、上座部の仏伝を研究すべきではなかろうか。

〈略号〉

LV: *Lalita vistara: Leben und Lehre des Śākya-Buddha*, S. Lefmann(ed.), Halle, 1902.

Mv: *Le Mahāvastu*, E. Senart(ed.), vol.I-III, Paris: Imprimerie nationale, 1882-1897.

T: 大正新脩大藏経.

(パーリ語のテキストは Pali Text Society 版を使用し、略号は通例に従う.)

〈参考文献〉

藤田宏達 [1981] 「仏伝資料の一考察」『仏教の歴史的展開に見る諸形態』, 創文社, pp.188-213.

〈キーワード〉 菩薩の入胎, 右脇, 結跏趺坐, 五つの前兆, 長部註, ニダーナカター
(駒澤大学大学院)